

令和8年度 第1回 岐阜市総合教育会議 議事録

- 1 日 時 令和8年5月29日（金） 13時30分～15時30分
- 2 場 所 藍東学園 1階 ハートルーム
- 3 出席者 柴橋市長、伊藤委員、奥村委員、小森委員
- 4 招聘者 株式会社サムライインキュベート 代表取締役 榊原健太郎 氏
- 5 傍聴者 一般2名 報道2名
- 6 次 第 (1) 市長あいさつ
(2) 協議

「探究を通じた新たな価値を創造する学びの実践」

7 議 事

(13時30分開会)

(1) 市長あいさつ

(2) 協議

① 事務局説明

(資料2 探究を通じた新たな価値を創造する学びの実践)

② 招聘者講演（榊原 氏）

(資料3 動けば、世界は反応する - 子どもに、挑戦する経験を届ける -)

③ 意見交換

●小森委員

アントレプレナーシップについては私も関心があり、岐阜市においてもいくつかの先進的な中学校での授業や市岐商デパートをはじめとして取り組んでいることは知っていたが、それをわかりやすくかみ砕いていただき、こういったところにエッセンスがあり、単に起業の真似ごとをするわけではなくエッセンスが大事でそこを展開していくということで、これからの取組についてヒントをいただけたと思う。まさに、先ほど藍東学園の皆さんから説明を受けて実際にその一端を見せていただいたが、榊原さんのお話と子どもたちの様子には非常に重なり合う部分があり、私の中で納得ができた。

そのうえで、未来を自ら拓く力を育むためにまだこれから重視すべき学びの方向性について、特に私のこれまでの経験から、接してきた子どもたちや最近の子どもたちの振る舞いを考えると、失敗を恐れない取組やリスクを取って行動するという点がキーワードかと思う。今日の子どもたちを見て、もちろん「匠」の授業であったこともあるかもしれないが、どんな学びをするか、どこで学ぶか、誰と学ぶかを子どもたち自身が選択していくという点で非常に自由な印象を受けた。動きを作っていくうえでは、場合によってはうまくいかないことや失敗はつきものだが、今の子どもたちはどうしても情報端末などを通じて最先端の情報に接していることもあり、先回りして「こうなってしまうからやめておこう」といったことや、失敗を避けようとする選択をとることも多いように思う。私も弁護士でリスク管理に関わる立場であり、こういうことをするとこういうリスクあるからやめておきましょうと助言する場面も多いが、子どもの教育にいたっては、事務局の説明にもあったような循環の中で、事前に情報を分析するとこういったリスクもあるかもしれないがそのリスクも取って行動しようといったことが必要ではないかと思う。仮にそのリスクが現実化して失敗しても、それは一つの学びであり、次の行動に繋げていけるという考え方の方が良いのではないかとお話を聞いて思った。いかに子どもたちに失敗の経験やそのプロセスを伝えていくことができるかが大事であり、「匠」の時間のような特別な科目やご紹介いただいたスポット授業で行うことも1つの手法であるし、普段の授業や活動の中でもそういったエッセンスを取り入れて、どの学校の先生でも理解できる方法として示すことも目指す方向性を考えるうえで良いことではないかと思う。日本の子どもたちは、周りの目を気にして突飛な行動や異質な行動が取りづらいこともあるが、そういった失敗を恐れないカルチャーによって皆が動き出せば一人ひとりの個性が伴ったものになっていくはずで、それが当たり前になってくると、同調圧力も無くなってより良い学校風土や雰囲気につながっていくという、アントレプレナーシップの精神が、他のことにもプラスの影響

をもたらすのではないかと思います。いずれにしても失敗を恐れないことが大事であるが、先ほど申し上げたような従前の学校教育の中にアントレプレナーシップのエッセンスを盛り込めるとしたらどのようなパターンがあるか、お考えがあれば教えていただきたい。

●榊原 氏

試行錯誤の中で財団の活動をしているが、おっしゃる通り学校にそのまま持っていくと先生の業務が増えてしまうのでやめて欲しいというお話をいただくため、現在は学校外で全て私達だけで運営するつもりで割り切っている。その中で、一緒にやりたいという話があれば、学校のカリキュラムに組み込ませていただきたい。藍東学園で言えば、ハートメイツとファミリーが合体したような形でアントレクラブのようなものを一緒に作るみたいなこともあっても良い。学校のカリキュラムに組み込むにはなかなかハードルが高く難しいと思っているところで、まずは前提として私達だけでもできる形で実施しようと思っているが、探究活動にスポット的な形で取り入れ、短い時間でも良さを感じてもらうことはできると思う。小森委員がおっしゃったように、皆成功した事例ばかり話すが、失敗した事例を話す時間を作ってもおもしろい。同学年の中で自分の失敗は言いづらいと思うが、異学年だからこそ9年生が下級生に自分が失敗した話をしてみんなが笑ってくれることもあると思うし、話せばフィードバックももらえ、次の行動につながり、失敗が価値のあることなのだと思う機会になるのではないかな。

●奥村委員

普段診療する中で、日本の将来を危惧している。岐阜で開業して20年以上になるが、無邪気だった子どもの元気がなくなり自分の意見が言えなくなる様子を見てきた。不登校も増えていく中で、このままでよいのかと思い、クリニックを経営している。

藍東学園を見学させていただき、こういう学校環境であれば、本当に不登校や通級が減るのではないかな、生きやすくなる子が増えるのではないかなと思った。今の子どもたちは失敗してはいけないと思って固まってしまう子が多いので、義務教育段階でアントレプレナーシップのエッセンスを入れていただくと藍東学園の子どもたちのように自分の意見を出せるようになって動けるのではないかなと思う。

小学校5、6年生で行うのがベストだというお話だったが、小学校に上がる時点で動けなくなってしまう子が多くいる。理由は色々あるが、子どもに理由があり動けない子もいれば、貧困や虐待、過干渉をはじめ、親御さんに精神疾患のある家庭など、家庭環境が要因で一步踏み出せない、学校に行けない、親から離れられない、教室に入れない子どもたちもいる。そういった子どもたちは、正解なんてないのにきっちりやらなければいけないと思いついたり、親の顔色をうかがって行動したり、自由に動くことができない。そういった中で、お話にあったような活動が小学校5、6

年生だけではなく、もっと下の年齢に広げる方法や考えがあれば教えていただきたい。

●榊原 氏

小学校5、6年生が人格形成されていくうえで良いタイミングだと思っており、そこからどう連鎖させていくかという話だが、藍東学園のような異年齢で活動する形であれば取り組みやすい。上級生が下級生に対して、失敗してもいいよと教えていくことができ、その活動を支援できる。もう一つは、いわゆる一人親世帯をご支援されているようなNPOや子ども食堂と連携しながら、親御さんに対しても支援していく。少年院を訪問する機会もあるが、親からの虐待にあっていた環境にあった子どもたちも多いので、大人にももう一度アントレプレナーシップのような考え方を広げていく形でカバーしていきたいと思っている。本当に現場は大変だと思うが、私達としてはまずそういった方を支援されている団体等の受付窓口のようなファシリテーション的な形でご家族への展開も含めて、お子さんに対して講義をさせていただきたいと思っている。

●奥村委員

親御さんの気持ちを変えるのは本当に難しいので、お子さんの成長を待つしかないことも多いが、その間に親以外に相談できる大人を作れるといいと考えている。藍東学園のような環境で育った子どもたちが親になったときには、おそらくその子どもに良い影響を及ぼすと思うので、藍東学園のような学校をもっとたくさん作って、そういう子どもたちが親になったときに、次の世代にその考え方が受け継がれていくのではないかと思うので、どんどん広げていただきたいと思う。

●伊藤委員

私達が通っていた学校とはまた違った、学校らしくない学校を実現していただき感銘を受けた。お話から、探究学習で考える力を育て、同時にアントレプレナーシップ、一步踏み出す力、動く力を育てていくという両輪が揃うことで、子どもたちは単に知識を得るだけではなくて、社会と関わりながらより深い学びができるということを感じた。特に、岐阜市には長良川や金華山、鶯飼、古い河原町の町並み、地域産業といった学びを支える豊かな土壌がある。教科書の中だけではなくて身近な日々の暮らしの中に本物の課題、本物の学びがあることに加え、県庁所在地であり、色々な方が住み、働いているということに深い学びができる環境が整っていることは岐阜市ならではのことももっと私達が感じなければいけないと思っている。私も大学でお仕事させていただく機会があるが、いかに岐阜県内の大学が生き残っていくかということを考えている。そこではアントレプレナーシップの話が毎回出てくるが、どうしても学生からは起業する人のための学問だと言われる。自分たちにはそんな力もないしやる気もないと、学生にとってあまり望まれない学びになりがちだが、教育の中で育てたいアントレプレナーシップはそうではないということをもっと発信していかなければいけないと思った。自分の身の回りの生活や地域の中にある課題に気づき、どうすれば良くなるか考え、地域の方や仲間と一步踏み出していく力は、起業する人だけに必要な力では

なく、子育てをする中でも大切な力であり、どこかに勤めても自分で考えなければいけないことは沢山あるので、アントレプレナーシップが起業に必要な学びではないということをもっと学校教育の中でも、先生方にもお伝えしていかなければいけない。

一方で、一人の大人として矛盾を感じることもある。探究学習が素晴らしければアントレプレナーシップが育まれ、社会課題に立ち向かうような人材が育っていくという流れは理想的だが、子どもたちの興味はどんどん変わっていくもので、変わっていくものにどのように寄り添い、新たに出てきた興味を深掘りさせてあげるか、そうした大人たちがどれほど周りにいるのだろうかと考え。歴史好きな子どもに、信長から始まり、戦国時代、日本の歴史へとつなげて学習させることも多いと思うが、ある意味、大人の立場から考えると、その興味を常に勉強法に繋げてしまうことがどうしてもあるのではないか。それはやはり受験が出口となっており、受験が最大の成功、失敗として考えられてしまうところがあると思う。そこがジレンマとして、私も矛盾したことを言っていると感じることもあるが、その辺りはいかが思われるか。

●榊原氏

私は子に対して特に勉強して欲しいと思ったことはないが、心がけているのは色々な機会や経験、風景を見せるということと、親も常に挑戦をしている姿勢を見せるということだ。色々なことを学ばせるとすぐ飽きてしまって、他のことをやってしまうとよく聞くが、私の場合は本当に色々なものを見せる中で自分が合うものを見つけてもらい、見つけた暁にはそれを助けることが必要なので、親が自分の夢に挑戦する姿を見せることによって、知らないうちに勝手に勉強に向かうこともある。

小学校のときに何になりたい、こういった職種に就きたいというゴールが見えればよいと思っており、アントレクラブで実施しようと思っているのは、色々なシーンでリーダーシップを取っている方々にも来ていただいて、小学校の頃に〇〇になりたい、どうやったら目指す姿になれるかということを考える機会をつくることだ。今は受験に受かることがゴールになってしまっているので、例えば市長になって岐阜市をもっと元気にしたいのであれば、市長になるためにはどうしたらよいかと考えるように、ゴールに対して今なにをすべきか、最終的なゴールをいかに小学校5、6年生で見つけられるような機会を提供できるかが大事だと思う。そうすると、親御さんも逆算して受験が必要なのか否か考えられると思うし、人生のゴールをどう一緒に見つけてあげるかがポイントである。

●教育長

学校の教員は子どもたちに将来どんな仕事に就きたいか問うが、子どもたちが夢を描いていけるようなプログラムが学校教育の中にどのように位置づいているのか考えると、まだまだ弱いかもしれないと思った。岐阜市内の中学校は学力が高い一方で、将来に対しての夢や目標があるという点においては、全国調査でもなかなか自慢できるようなレベルではない。不登校については踏ん張っている現状にあるが、それらの要因がどこにあるのか考えると、幼児期から大学入学までになりたい自分がなかなか見えにくいプログラムの弱さがあるのかもしれないと思った。なりたい自分を見

える化するためには、自分で働きかけないと見えていかない。そういった中で、アントレプレナーシップを学校内の教育に取り入れることは、学ぶ意味や目的を見える化していく営みにもなっていくかと思う。今まで漠然としていたものが分かりやすく腑に落ちた。

今日は藍東学園を見学いただいたが、草潤中学校、藍川北学園に限らず、全ての子どもたちが将来に向かって自信を持って自分の人生の舵取りをしていける力をどの子にもつけてあげたいと思っており、榊原さんのお話を含め、藍東学園のコンセプトとベクトルが似ていると思い大変ありがたく感じた。最近聞いた講演の中で、「夢を馬鹿にすると路頭に迷う時代がやってくる。」という言葉が心に残っているが、人から与えられる仕事はAI に取って代わられるので、自ら作り出すものだけが残っていくだろう。それに近いことを学校教育の中に入れようと思うと、このアントレプレナーシップや、榊原さんがおっしゃったようなプログラムは必然になってくるのだろうと強く思っている。

なぜ小学校期なのかという話があったが、実は幼児は自分でやってみたいことをやるし、嫌なことをやらない。それがだんだんシステムというもののの中に入っていくと、やらなければいけないこととか、やった方がいいことが見えてくるから、本当に自分のやりたいことよりも、そちらをバランスよくとっていくという学びになっていくのだと思う。小学校でアントレプレナーシップの基礎に出会わせ、中学校でどのように発展していくのか、大学の学部選択に至るまでどのようなビジョンで発展していくのか教えていただきたい。

●榊原氏

小学校5、6年生のときに、将来こういった課題に取り組みたい、こういった人になりたいなど何となくぼんやり掴んでほしい。中学校では、アントレプレナーシップをもって、将来自分がそれになるためにどうすればよいか、かつそれに必要な勉強は何なのか理解し取り組めると一番良いとは思っている。高校になると起業する方も増えてくると思うが、インターンシップ等、社会に近い場所に身を置いたり、さらに大学に行くかどうか判断したり、より実践に近づいていくイメージである。

●市長

榊原さんのお話の中で、「正解がある世界から正解を作る世界」ということで、まさにこれから正解そのものが非常に不確実になってくる。子どもたちが自ら問いを立てるという言葉もあったが、子どもたちが自分なりの正解を自分でどう紡ぎ出していけるか、そういう力が本当に必要だと私自身も実感をしている。また、課題は地域や現場にあるということも非常に共感するところだ。アントレプレナーシップが何のためにあるのかというと、私達の社会を取り巻く地域課題の解決には色々なアプローチ、職業があるけれども、根本は世の中の人々を幸せにするためにあるという点がとても大事だと思っている。

次に、自己効力感のベースが小学校期に形成されるというお考えについて、先ほど奥村委員にもお話いただいたが、私達の共通の問題意識の1つとして、不登校の低学年化、低年齢化がある。今年度も、わくわく学校プロジェクトや藍東学園の学びをはじめとした様々な取組を通して、低学年

の子どもたちにもしっかりと光を当てながら、学びが楽しいと感じてもらえるように取り組んでいる。10歳というのは子どもにとって大きな節目であり、10歳に至るまでとそれ以降では子どもたちの物事の考え方も立体的になり、人間関係のコミュニケーションも複層化してくる。4年生から5年生にかけての時期であり、榊原さんが5、6年生にフォーカスされるのは、10歳という子どもたちの大きな変化の節目をベースにしているところもあるのではないかと受け止めたところだ。失敗を経験に変える練習の時期ということをおっしゃっていたが、私も中学校を訪問して失敗のすすめをひたすら説いてきたが、失敗していいんだと話をすると子どもたちの目の色が変わる。失敗しないようにと周りから期待もされるし、自分自身も自分に対して期待をするし、プレッシャーもかけているのだろうと感じる。社会に出て取り返しのつかない失敗を犯すと本当に大変なことになるが、まさに安心して失敗を経験できるのが学校という場所だ。人間関係でもアプローチやコミュニケーションの仕方が間違っていて、失敗してトラブルになったとしても、もう一度回復をして、こういうコミュニケーションのアプローチの仕方をするすると相手が怒る、悲しむということを学ぶ場が学校であると思うので、どんどん失敗しようということを広げていけたら良い。

それから、アントレクラブで育む4つの力ということで、挑戦するマインド、課題発見・解決の思考、協働する力、言語化して伝える力ということでお話をいただいたが、まさに今挙げていただいている4つの力は全て非認知能力である。本当に答えのないこれからの社会において、とにかく暗記していろんなことを頭に入ればそれでこと足りるかということ、その知識はAIが教えてくれる。そうしたときに、これからの子どもたちには、この非認知能力を学校教育の中、あるいは学校外で体得して社会に出ていってほしいと強く思うので、これからアントレクラブの活動が本当に全国に広がって、子どもたちが非認知能力を身につけるチャンスをたくさん得てほしい。

そういった中で、私達は、いじめ重大事態から教育大綱を改定し生命の尊厳を一番のベースとして取り組んできた。これが本当に大きなキーワードとしてあり、一人ひとりが価値ある大切な存在として互いに認め合う教育を推進するということを掲げて取り組んでおり、もちろんこれからも私達の基本方針として大切にしていきたい。加えて、実現への方策とか姿勢の中にも探究を核とするという記載をしているが、本当に正解のない世界の中で、子どもたちが生きる力を育んでいくためには、この探究の学びやアントレプレナーシップ、また、リーダーを支えるために一緒になってチームとして挑戦する、チームとして社会課題の解決をする一つの解を導き出していくようなイントレプレナーシップといったことも同時に大事だと思っており、子どもたちが学校教育、あるいはそのプラスアルファのところで獲得できるとよいのではないかと思います。先輩方のおかげで、岐阜市には幼稚園から大学まで一貫した公教育の機会があるので、こういった岐阜市の公教育の土台に探究の学び、アントレプレナーシップといったようなものを岐阜市の教育大綱に一部改定するような形で、プラスアルファで付け加えていけると、教育大綱が子どもたちにとってより価値あるものとして、私達の共通項になっていくと思う。今年度は、教育大綱の一部改定ということについても、総合教育会議で皆様と議論をしていきたいと思う。現行の教育大綱を策定した際にも、総合教育会議で議論していただいて、教育委員の皆様にも色々な助言をいただき一緒に作り上げてきたものであるので、一部改定についても皆さんと一緒に取り組むことができたらと思い、私から提案させていただきたい。

●教育長

教育長に就任してから、総合教育会議での議論を重ねて作られた現行の教育大綱を教育に関する憲法のように思いながら、これをベースにして岐阜市教育振興基本計画を動かしている。市長がおっしゃったように、これからの時代を生きていく子どもたちにどんな力をつければいいのか、もう少し見える形にしてもよいと思っており、根本の哲学を変えるわけではなく、もう少しどの力をつけていくことが大事なのかを見える化するとよいのではないかと思うので、総合教育会議の中で議論を重ねられたらありがたい。

●伊藤委員

子どもたちが豊かに生きていくために必要な力やマインドというのも、ぜひ教育大綱に補足していければと思う。

●小森委員

教育大綱に関して、これは不変のものではなくて、社会の状況や課題によって変わっていくものだと思っている。特に、生成 AI の発展をはじめとして、ここ数年の動きが現大綱を作った頃の学び方や問題意識とまた違ったものが出てきていることに合わせて変えていかなければいけないというところで、変えてはいけないものは大事にしつつ、変えるべきものは付け加えていくということが大事だと思う。加えて、教職員を取り巻く状況もここ数年で変化してきたところもあるので、一緒に議論させていただきたい。教育関係者が見るだけではなくて、市民の方が見て分かりやすく理解して協力していただけるような表現や言葉遣いというのも一緒に検討していただきたいと思う。

●市長

現行の教育大綱は、当時の伊藤委員とも一緒に議論し作り上げていったが、新たな委員の皆さんも加わっていただいております、改めて最新の状況をしっかり見ながら改定をしていくことが大切ではないかと思っている。ぜひ今年度の議論の中に加えていただいて、より良い理想を追求しながら作っていきたい。